赤羽別院報 第25号
発行所　真宗大谷派　赤羽別院　親宣寺
発行人　輪番　浅野　怜
愛知県幡豆郡一色町大字赤羽字上郷中14
Tel・Fax（0563）72－2308

人身受けがたし

「人身受けがたし」これは南無阿弥陀仏、お念仏と一緒であると、私は感じています。南無阿弥陀仏とは、日頃気づいていない大切な事にどうか気づいてくれよという、仏様からの呼びかけのお言葉だと教えられているわけです。

「人身受けがたし」という言葉は、少し砕いて言うと「人の身受けとめがたし」つまり、人と生まれたこの身を本当に受け止める、頂くということは容易ならないということを表しているのではないでしょうか。その意味でいえば、教えを聞くということは、我が身を受け止めていく道であるわけです。これはなかなか容易ならないことです。

全てを受け止めるのです。ここはいいけど、ここはだめというのでは違うわけです。私のこの身を丸ごとを受け止めるのです。人の身を受けているのに、そのことを丸ごと受け止めるという事は容易ではないことだなと思うことです。一大事であるといってもいいと思います。

親鸞聖人は人間という言葉を「人と生まるるをいう」と仰っておられます。人間とは人と生れて、人と生れ続けていく存在であると仰っているのではないでしょうか。

人と生まるるを言う

人間という言葉は「人」と「間」で出来ていて、人と人との間で人間になっていくものであるという意味をあらわすのでしょう。親とか友達とか先生とか周りの人と、そういろいろな人との関わりの中で人になっていく。人と人とのつながりの中で育てられてきた。それなのに、つい生意気になるとそんな事を忘れるのです。自分一人で大きくなったつもり、偉くなったと勘違いをするのです。

これは、真宗の教えの中で、非常に大事な心得であると教えられました。そこにある大切なものは「縁」ということです。ご縁です。人と人とのつながりといってもいいでしょう。そのご縁を大切にするということが薄れてきたということが指摘されています。

死生観

最近あまり使われないのですが「死生観」という言葉があります。つまり、死を通して生を受け止めていくことです。人間はいずれ亡くなっていくものです。限りある命だからこそ、生きている事を大切に感じるのです。

「死生観」そこに「生きる」という課題があるのではないでしょうか。

真宗門徒は、お葬式を終えると、還骨勤行がつとめられて、そこで白骨の御文を頂きます。御文の「後生の一大事」、これも今日なかなか受けとめることが出来ない言葉ですね。

「蕨野行」という映画があります。内容は東北地方に江戸時代まであった、棄老伝説、いわゆる姥捨て山伝説です。生きること、食べていくことが大変な時代の中で、山に息子が年老いた母親を棄てたという伝説。その映画の中では、六十歳を過ぎた年寄りが、自ら山に行くのです。その映画監督が「今の日本人は死生観がはっきりしていないのではないか。死生観がゆがんでいるのではないか。人間はいつか命を終わっていかなければならない。その終わっていかなければいけない命をどう生きるのか、そういうことがはっきりしていない。いつまでたっても生きていることが一番良いと思っている、どう生きるかということが、忘れられている。だから、どう生きるのかということを訴えかけたかった」と仰っていました。

また、その映画に主演した、市原悦子さんはこういうことを仰っていたそうです。「死を受け入れるという事は、死ぬまできちんと生きるってことなのよね」と。

死を受け入れたくはないけども、受け入れなければならない。これはまさに、真宗でいう「後生の一大事」ということではないでしょうか。

死を自覚しつつ、生を大切にする。いろいろ申しましたが、「人身受け難し」という言葉は、受け難き人身を丸ごと受け止めていく、そういう生き方です。

現代という時代の中で、いのちを根底から、足元から、見直す言葉、それが「人身受け難し」であるということでございます。

平成22年8月25日
赤羽別院暁天講座
より抜粋

■講師プロフィール
黒田　進師（くろだ　すすむ）
一九四四（昭和十九）年生まれ
滋賀県長浜市
真宗大谷派
黒田山　満立寺前住職

謹賀新年　年頭所感

慈光のもと、有縁の皆さま方におかれましては、明るい希望に満ちた新春をお迎えのことと、大慶に存じます。

旧年中は赤羽別院親宣寺・赤羽地域教化センター運営・護持のために、崇敬区域のご寺院・ご門徒の皆さま方には大変お世話になりましたことを、年頭にあたり衷心より厚く御礼申し上げます。

本年も崇敬区域の皆さまの共同教化の拠点となるべく、別院・センターとしての役割を十分果すよう一層の努力をして参る所存でありますので、倍旧のご支援を賜りますようお願い申し上げる次第です。

さて、昨年は皆さまのお力添えにより、法要は勿論のこと、充実した教化事業を実施することが出来ました。

法要は修正会に始まり、双全講、春・秋の彼岸会、報徳会、夏の御文、報恩講等を厳修し、教化事業では、真宗講座、暁天講座、門徒会研修会、公開講演会等を展開し、充実した内容でありました。

なかでも、別院の活性化の根幹として、輪番就任以来取り組んできました「報恩講」を、十月十五日から三日間、「岡崎教区赤羽別院報恩講・宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け法要」として、七十四年振りに御門首をお迎えして御親修で執り行うことが出来、御門首より引き続き来年の宗祖の御遠忌円成に向けてのご挨拶があり、万感胸にせまる思いでした。

さらに、記念講演として、田代俊孝同朋大学大学院教授が、倫理的な観点から、今回の御遠忌テーマに則した「いのちの尊さ」について熱く語られました。

本山や教区からの助成もさることながら、当別院のような小規模別院でも、崇敬区域のご住職・ご寺族・ご門徒の皆さま方の献身的なご尽力と特別ご懇志のお陰で、法要を立派に厳修し、諸行事を円滑に行うことが出来ることが立証されたものと誇に思い、重ねて衷心より厚く御礼申し上げます。

親鸞聖人は「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人法然上人のおおせとしていただかれました。

この本願念仏の教えを相続していく身となるべく「宗祖親鸞聖人に遇う」というご縁をいただくために、多くの有縁者と共に御遠忌に参詣出来ますよう勝縁を願っております。

それを機縁として「お待ち受け法要」を厳修した経験を糧として、赤羽別院としましても、近い将来に「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け法要」が厳粛に営まれますことを念願しつつ、新春のご挨拶とさせていただきます。

赤羽別院輪番　浅野　怜

別院行事のご案内

除夜の鐘（初鐘）
12月31日（金）午後11時45分より
先着順にどなたでも鐘撞きできます。

修正会（しゅしょうえ）
1月1日（土）午前7時
法話　第14組　専興寺　住職
赤羽別院　輪番　浅野　怜師

真宗講座（しんしゅうこうざ）
講題　「宗祖親鸞聖人に遇う」
―親鸞聖人のお手紙から―
第1回　1月24日（月）午後2時～4時
第2回　2月14日（月）午後2時～4時
講師　同朋大学学長　尾畑　文正師

双全講（そうぜんこう）
1月15日（土）午前10時・午後1時
法話　第10組　蓮正寺　稲垣　智師

春季彼岸会（しゅんきひがんえ）
3月20日（日）午後1時
法話　第13組　安休寺　曇英　真人師
3月21日（月）午後1時
法話　第12組　願海寺　壹郷　有二師
3月22日（火）午後1時
法話　第14組　蓮成寺　青木　馨師

晨朝法話（じんじょうほうわ）
12月13日（月）第13組　安休寺　曇英　真人師
12月28日（火）第13組　榮蓮寺　竹内　馨師
1月13日（木）第14組　千福寺　山田　淺順師
1月28日（金）第14組　西光寺　清澤　普師
2月13日（日）第8組　福正寺　本多　友明師
2月28日（月）第8組　専念寺　羽向　智洋師
3月13日（日）第9組　了淳寺　大渓　専淳師
3月28日（月）第9組　妙隆寺　大渓　康照師

お寺の掲示板

如来は
私を信じ
敬い　愛する
第11組　唯法寺

岡崎教区 赤羽別院 報恩講・宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 お待ち受け法要厳修

74年ぶり 御門首御親修

遠慶宿縁―様々な方々のご縁に、報恩講・宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け法要が、七十四年ぶりに真宗大谷派第二十五代・大谷暢顯御門首をお迎えして厳修されました。

宗祖の「本願念仏の御教えをよりどころとして生きる人の誕生」を願いとして、同信同行が集い、法要を営むことが出来た喜びはこの上ないものであります。

報恩講・お待ち受け法要

当別院にとって住職でもある御門首を七十四年ぶりにお迎えして、五十年に一度巡り合える報恩講・お待ち受け法要を厳修しました。

十月十五日午後、輪番による「帰命無量寿如来」の調声により三日間の法要は始まり、十五日と十六日には御伝鈔の拝読があり、東脇芳幸師が上巻を、本多友明師が下巻を読みあげました。

十七日午前、御門首自らの執刀による帰敬式が行われ、受式した一〇七名の一人ひとりに丁寧に声をかけられました。

御門首による登高座

午後からの結願日中は、余間に御門首夫人の参拝を得て厳かにお勤めされ、満堂の参拝者と境内のテント席でお参りになる方々が、心を一つにしてお念仏を称えておられました。

法要後の御門首挨拶では、二〇一一年本山において厳修される「宗祖御遠忌法要」には、御真影の前で皆様と共に、念仏相続のご勝縁に遇わせていただきますことを心より念じます」のお言葉を戴きました。

お剃刀の儀

記念講演は、同朋大学大学院教授・田代俊孝師をお迎えし「今、いのちがあなたを生きている―科学の向こうにあるもの―」と題し、科学の知、理性の向こうにある涙の出るいのち、つながるいのち、それを知らしめてくれるのが念仏であるとお話し下さいました。

この後浅野輪番は、多くの方々のご協力により、法要をつつがなく営むことができたことや大勢の皆さんにお参りいただけたことに対し、感動と感謝の念を述べ法要をアえました。

聴聞者に笑顔・田代師

思えば、三月に三十九名の委員により「お待ち受け法要実行委員会を発足させて以降、本山や岡崎教区の関係各位の格別のご協力をいただいた結果「御門首御親修」を得て、賑々しく厳修することが叶いました。

一方で、当日の境内周辺での交通整理やお斎の仕度等々陰の力となってお働き下さった多数の方々がおみえになり、このご苦労に支えられていることを忘れることはできません。

植樹式

十七日午前、別院の山門を潜られた御門首夫妻は、お御堂の御本尊に参拝された後、浅野輪番を伴い植樹式に臨まれました。

記念樹は「菩提樹」で庫裡の前に植栽され、この脇に七十四年ぶりに赤羽別院で御親修があり、御門首がお手植されたことを記念して石柱碑が建てられました。

記念植樹のようす

御門首夫妻 歓迎懇談会

十六日夕、吉良町のリンクスにおいて、御夫妻の歓迎懇談会が開かれ、ご来賓・門徒・住職等関係者八十名が参加されました。

輪番による歓迎の辞の後、記念品と花束を贈り、教区門徒会石川嘉弘会長の発声で乾杯をして宴に移った。

アトラクションでのオカリナとピアノ合奏による美しい音色が響くなか、御夫妻は出席者との写真撮影に気軽に応じていただけ、そのお人柄に感激しました。

最後に、オカリナの伴奏により恩徳讃を斉唱して幕を閉じました。

（石川・稲垣記）

花束を手にする御夫妻

一楽真師をお招きして 教区公開講演会

過九月二十八日、赤羽別院より始まった公開講演会は、講師に一楽真師（大谷大学教授）をお迎えして、宗祖親鸞聖人が、九十年の生涯をかけて明らかにされた本願念仏の教えについてお話いただいた。

師は、本山御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」に副題―無量寿に帰す―を付してお話しされ、平日にもかかわらず百二十余名の聴聞を賜わった。

本年、宗祖親鸞聖人のご正當をお迎えする今「聖人の教えをどのように戴いていくのか。これが御遠忌をお迎えする一番大事なことだと思う。聖人は何を遺してくださったか。同時に私達はお念仏をどのように戴いて、次の世代にお伝えしていくのか。

私たちはその流れの中に生きている。宗祖の御遠忌はそれらのことを頂戴しなおす大変大事な機会だと思うわけであります」と『正信念仏偈』の一節より「帰命無量寿如来」即ち〝無量寿に帰す〟を念頭に提言いただいた。

時・状況・自分の都合によって拵え、常に動いて止まないものを作り出し迷う世界。危うさの内に生き、量る必要のないいのちに出遇う。年始め、改に戴きなおしたい。

（稲垣記）

会場の様子

高須克弥氏 礼盤・焼香卓等を寄贈

真宗寺院のお内陣の荘厳はお浄土を表わすといわれ、私たちを清浄な気持にさせてくれます。

赤羽別院では、かねてよりお内陣の荘厳の充実を図ってきたところであります。

そんな折、今回のお待ち受け法要の御親修を機縁として、ご当地の高須克弥氏より

一、礼盤（登高座）　一式
一、焼香卓　一脚
一、金香炉・香盒　一式

をご寄贈いただきました。

十月十七日には、新調の礼盤により御門首の登高座が厳かに執り行われ、結願日中法要が執行されました。

子供の頃の遊び場として、当別院に特別な思いを抱いておられる同氏は、この法要に満堂の皆さんとともに真剣な眼ざしでお詣りされ、この度のご縁をとてもお喜びのようすでした。

私たちは、同氏のご懇念を鄭重に受けとめ、子々孫々に到るまで大切にして、法義の相続と別院の護持に努めなければならないと改めて感じた次第です。

（浅野眞記）

礼盤一式

焼香卓・金香炉・香盒

うなぎ割烹
みかわ 三水亭
愛知県幡豆郡一色町大字坂田新田字西江95-10
TEL. 0563-72-8817
営業時間 AM11:00～PM2:00（オーダーストップ）
PM 5:00～PM8:00（オーダーストップ）
水曜定休
P 完備 観光バス10台・乗用車50台
詳しい情報はインターネットで 三河淡水グループ 検索

Yes! 高須クリニック
美容外科・形成外科・美容皮フ科・泌尿器科・歯科
院長 高須克弥
●年中無休 ●予約制
赤坂 地下鉄千代田線 赤坂駅5番A出口すぐ
〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-27 国際新赤坂ビル東館12F
TEL.03-3587-2061
歯科直通 03-3583-9244
電話受付 9:30～22:00 0120-5587-15
歯科専用 10:00～19:00 0120-4180-86

各組のお待ち受け法要のようす

第9組

みんなで練習　みんなでお勤め

去る11月12日、吉良町乙川の了淳寺において、岡崎教区第九組・組内報恩講並びに宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌お待ち受け法要が執り行われた。

組内11ヶ寺のご門徒さんとともに、聖人のお示しくださったお念仏の教えを学ぶべく、皆で一緒にお勤めをしようと、事前に声明の練習会を行った。

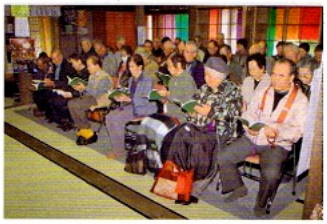
練習会は3回6時間であったが、毎回会所を変えたところ、お手次以外のお寺にもお詣りすることができると好評であった。

正信偈・真四句目下、和讃・五十六億七千萬を自らお勤めすることにより、お念仏の意味やありがたさが実感できるという声が聞こえとても有意義であった。

当日は、70名もの力強い声明が本堂中に響きわたり、無事に勤めあげた後には、全員の方々の表情に充分な満足感がうかがわれた。

お勤めの後、豊川市の正願寺住職・三保谷順師による法話では、普段私たちの食卓にのぼる豚肉を例に、豚をただの食材にしてはダメ、命をくださったものに合掌をすべきであると、御遠忌テーマである命の大切さを訴えられた。

（藤原記）


みんなでお勤め

第10組

第10組では、去る10月4日、願正寺において「宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌お待ち受け法要」を厳修した。

法要への取組は、その目標を僧侶とご門徒さんが一丸となって、ご遠忌法要の意義を改めて確認するとともに、聖人が伝えて下さった「お念仏のみ教えに今一度出遇いなおすこと」においた。

お念仏に出遇いなおす

そこで、50年に一度の「御遠忌お待ち受け」ということから、先ずは「ご荘厳」ということで、二日間にわたり「お華束づくり」と「お華立」に、ご門徒さん・住職・坊守と多くの方々が取組んだ。

当日は、百余名もの方々にお詣り戴く盛会となり、勤行では門徒会員の方々が、声明講習会で汗を流しながらお浚いをした成果を披露し、助音として僧侶とともに声高らかにお勤めした。

記念講演では、本山職員・鈴木君代さんと六ツ美組・浄妙寺住職天白真央師による法話コンサートが催され、息のあったお二人の演奏と歌声が境内に響きわたった。君代さんは「一人で生きているのではなく、命のつながりの中で生きているのだよ」と語られ、この法要を通して尊いご縁に出遇うことができ、心に残る感動の法要となった。

（石川祐記）

お華束づくり

2011年 東本願寺 御遠忌テーマ

今、いのちがあなたを生きている

第11組

第11組では、親鸞聖人七五〇回御遠忌法要を10月11日午後、西尾教会本堂において厳修いたしました。

記念講演は、池田勇諦先生をお迎えして行われ、信心とは「真の主体を戴くこと」であることをお話いただきました。

報恩講のあり方を総点検

私たちは、御遠忌を迎えるにあたり、真宗門徒として一番大切な報恩講のありかたを、今一度総点検をしてみようと考えました。聞法はもとより、お勤め、仏華の立て方や御華束作りなどを共に学び、一つひとつのことを疎かにせず、こころを込めて行うことから確かめようとするものです。

先ず、9月29日に子供報恩講をお勤めし、10月2日にはお内仏のお給仕の講習会を行いました。

声明については、報恩講のお勤めを、第10組と共同して瀬尾顕證先生の講習を二回受講したうえで、その内容をもとに、組内で五回練習会を行いました。

また、仏華の講習会には、松田由彦先生を二回お招きして教えていただきました。

先生は、仏華はこちらから仏様へ荘厳してあげるのではなく、すべて如来の回向表現であることをお話くださいました。

（占部記）

池田勇諦師による法話

第14組

赤羽別院御堂にて厳修

穏やかな秋日和の去る十月十九日、第十四組では御遠忌お待ち受け法要を実施しました。

「宗祖としての親鸞聖人に遇う」という御遠忌の基本理念に基づいた法要は、以下のような内容でした。

①赤羽別院御堂にて寺族と門徒が一緒に勤行（勤行集の日中勤行）

②講話「お待ち受け法要の意義と親鸞聖人に遇う慶び」（青木馨師）

③親鸞聖人像の原点「安城ノ御影」展を観覧

参加者は寺族方と門徒方総計八十五人を数え大変な盛り上がりでした。

第十四組の門徒さんには今まで縁の薄い赤羽別院ではありましたが、住職と一緒に心の底から声を張り上げ、正信偈を勤行したことは忘れられない思い出となったことでしょう。また、青木氏の御遠忌に対する篤き思いが門徒さんに伝わり、改めて聖人の偉大さを感じ取られたのではないでしょうか。「安城ノ御影」展では解説者の熱心な説明に、全員が心を吸い込まれるように聞き入っていました。秋の日が暮れつつある博物館の庭園を皆さん満足そうに家路につきました。

第14組　組長　平等寺　斉藤正

勤行のようす

ゴボちゃん HOUSEN

第2回投稿俳句会

第2回投稿俳句会には、四〇名の方々から一〇二句の作品のご応募をいただきました。

秋季彼岸会が営まれた9月22日、このなかから最優秀作品の詠み人10名をお招きし、浅野輪番から賞状に記念品を添えて称えられました。

選者　田中昭二・三浦貞子

優秀作品（順不同）

晴れ晴れと　御坊山門　秋高し　中川　道子
梅雨茫々　内陣の闇　深うせり　東脇　妙子
蓮の実の　飛んで一揆野　晴れ渡る　神取　和沙
梅雨晴れ間　きらきら笑ふ　鬼瓦　加藤あさの
山門は　御坊の象徴　御講晴　伴　きく子
梅雨明けの　動かぬ雲の　白さかな　中根佐代子
蓮開く　雨の極楽　浄土かな　石川　松葉
晴と書く　日記彩増す　夏木立　鎌田　晴枝
一山を　包みて低き　梅雨の雲　谷　水甫
梅雨晴の　弥陀堂へ曳く　乳母車　蓮沼たけし

お仏壇・仏具は　やっぱり京都・・・
経済産業大臣指定伝統的工芸品
京仏壇・京仏具
朝に礼拝　夕に感謝
SINCE 1830
(株)若林
www.wakabayashi.co.jp
京都本社/京都市下京区七条道新町東入
☎(075)371-3131㈹　〒600-8218
フリーダイヤル 0120-37-8585(各店共通)
東京店・築地店・札幌店・仙台店
近江草津店・福岡営業所
E-mail info@wakabayashi.co.jp
Support 750

法衣/袈裟/打敷/念珠/幕/記念品
合資会社 縫源法衣店
真宗大谷派 法衣・御稚児貸衣装
〒460-0015　名古屋市中区大井町1-39
TEL（052）321-4965
FAX（052）323-9559

人間模様 その7

今回は、お手次寺の枠を超え、別院は元より、数多くの寺院へ聴聞に足を運ばれる碧南市霞浦町の金原誓さん　にお話をお伺いしました。
日々の生活のなかにおいても「ナマンダブツ」とお念仏が口をついてでる金原さんは、真宗の教えに出遇えた喜びを熱心にお聞かせ下さいました。

―　お寺に聴聞に通われるきっかけはいつからですか

金原　小学生時代の教師が真宗のお坊さんでした。戦時中でしたので、代用教員として見えていたのですが、十代の素行のよくない私の悩みを聞いて頂くなど、人生の師としてその後もお付き合いが続きました。そのようなご縁もあり、初めてお寺でお説教を聴いたのは二十歳くらいでした。

ただ、母親が大変熱心な念仏者でしたので、真宗の教えについては大げさにいえば母親のお腹の中にいたときから聴いていたといえるほどです。

金原さんご夫婦

―　御両親の影響が大きかったと言う事ですね

金原　親は、私と弟を僧侶にするつもりでした。「誓」という名にはその願いがこめられています。

実際には私も弟も魚屋や寿司屋という「殺生」の仕事についてしまいましたが「そんな身でもこの教えは助けていただけるよ」と母はいつも言っていました。

―　ご家庭のなかでも真宗の教えが大切にされていたのですね

金原　私の家では、月に七日、先祖の命日を勤めていました。また、昭和の終わり頃までは、年二回ほど全国から自宅に布教師さんをお招きし、百人以上の人を寄せて法座を開いてきました。そういう点では家が道場のようなものでした。

―　今、思われることは

金原　最近、八十歳を前にして痛切に思うのは、この歳までよく生かされてきたなという思い。同時に「人はみな死ぬのだ」という事を絶対に忘れてはならない。短いこの先の人生をこれまで以上の生き方で、一日も早く信心決定し「生きてよし死んでよし」のわが身になりたいと願っています。

（平野記）

■■■カルチャーウォーク・その7■■■

城郭伽藍の姿を留める 安城市野寺 本證寺を訪ねる

遡ること凡そ七百年前の鎌倉時代に、広大な寺地に城郭伽藍を誇り、その姿を今に留める三河真宗寺院三ヶ寺触頭の一つ、名刹・雲龍山本證寺を安城市野寺に訪ねて、住職小山正文師から興味深いお話をうかがった。

本證寺は、境内に内堀・外堀の一部と土塁を今に残す、全国的にも珍しい城郭伽藍様式のお寺である。

開基は慶円上人。下野国（現在の栃木県）小山市の名家の武士・俗名を靭負佐兼光（ゆきのえのすけかねみつ）十三歳の折、出家して慈円を師として天台僧となるも、越後の国府にて親鸞聖人の教化を受けて真宗に帰依した。

本堂内陣北脇壇の厨子には、等身大の慶円上人の座像を安置。平成八年解体修理の際、一三四七（貞和三）年の墨書が発見され、真宗最古の肖像彫刻と判明した。

一方、寺が保有する絵伝からは、寺の成り立ちと特性を窺い知ることができ、仏の教えを画で示し、庶民に最も解りやすく説いている。

荘厳な構え・本證寺

本證寺は、善光寺如来絵伝四幅・聖徳太子絵伝十幅（何れも国重文指定）・法然上人絵伝七幅を所蔵し、何れも真宗初期教団のあゆみを知る貴重な資料である。

三種の絵伝を紐解くと、長野善光寺の本尊はインド（天竺）で作られた阿弥陀三尊像であり、日本に初めて浄土教が伝わったことを示している。

更に、聖徳太子は日本中に仏教を弘められたひとであり、法然上人は一人ひとりの胸の内に念仏を届けて下さった方で、親鸞聖人が師と仰いだひとである。

これら仏教の大パノラマを表わした絵伝から、念仏の教えが自然と伝ってくる。

本證寺では、かつては年間凡そ二〇〇の絵解き座を各地へ出向して行い、多くの人々が聴聞し、その都度お仏供米が寄せられ、このなかから沢山のお米が本山へ上納された。全国から本山への上納米のなかでも特筆すべき量であった。

この結果、本山の経済力は時の為政者徳川家康の目につくところとなり、東西本願寺分立へとつながったのである。

―次号へつづく―

（三村記）

門徒の声

草を取る

精農は草を見ずして草を取り・中農は草を見て草を取り・駄農は草に追われて草をとる。

このことばは、どなたが言われたものか不明であるが、私は隣家のKさんから教わった。Kさんは精農家で、まさに朝星夜星をいただいて農事に精進された。Kさんの畑はどの畑も草一本生えていないほどの管理のよさで、畝の切り方から作物の出来ばえまで、まことに見事なものであった。

Kさんは、自ら草を見ずして草を取ることをその生涯を通して実践してこられた。

今、当時を思い出し、改めて尊敬の念を深めている。畑だけでなく、屋敷まわりも家の中も常に清潔整頓に勤めてこられた。このことはKさんの先代からのことで、Kさんのはお父さんの薫陶によるものであろうが、Kさんの亡き後ご子息にも引き継がれており、まさに三代百年にもわたる快挙で見事というほかない。

Kさんの家には、今も「草を見ずして草を取る」その精神が生きていて、敬服の極みである。

御文に「浄土二往生スベキ事サラニウタガイナシ」とある浄土とは「仏または将来仏となるべき菩薩のいる清らかな所」である。

毎日帯目の立てられている庭園、拭き抜かれ磨き抜かれた床の清らかさは、まさに、この世における浄土である。その清らかさは「草を見ずして草を取る」その精神のなせる賜物ではないかと思うのである。

第12組・願海寺門徒　鈴木　敏

◆仏事Q&A◆

Q 蝋燭には、朱と白がありますが、どのように使い分けたら良いでしょうか？

A 法要をお勤めするときには、次のように蝋燭を使い分けます。

・赤蝋燭
修正会（お正月）・お彼岸・お盆・ご引上（報恩講）・祥月命日・年回忌法要など

・白蝋燭
毎月の命日・中陰中のお勤めなど

今日では、洋蝋燭を用いることが多いですが、法要をお勤めするときには、イカリ形の和蝋燭を用いましょう。

朝夕のお勤めに、電気蝋燭を用いることがありますが、木蝋燭を立てるようにしましょう。

（小栗記）

電気蝋燭

木蝋

壹郷有二師が列座見習就任 列座（見習）4名に

当別院では、10月1日付で列座見習として、第12組願海寺若院・壹郷有二師をお迎えしました。

師が就任したことにより、当別院の列座（見習）は、第8組福正寺・本多友明師、第10組法圓寺・石川祐美子師・第14組常瑞寺・大河内哲師と併せて4名体制となり充実したものとなりました。

壹郷師は、就任にあたって、次のように師の篤い思いをお寄せになりました。

列座としての抱負

ある先生から『各地方の「御坊さま」（別院）に安置されている親鸞聖人の御影を「真向きの御影」或いは「等身の御影」と呼び、各地方のご門徒が、本山の「御真影」と全く等しい意味を持つ「等身の御影」に直参できるよう配慮されている』とお聞きしたとき、私のなかで、別院が護持相続される意味が明確になった。

御坊とは地方における真宗本廟なのである。

赤羽御坊に、真向かいになって我らを見つめる、等身の親鸞聖人がいらっしゃるではないか。

苦悩するいのちを生きるなかで、それでもなお、人間として生まれた意味を見い出したいと願う愚生、喜んで親鸞聖人の教えに直参し、謹んで奉職させていただく所存であります。

壹郷　有二

懇志披露

赤羽御坊　新聞御懇志（敬称略）

正向寺
石川　佑二　歳貝　貞雄
歳貝　悟　大見　皎

山門修復御懇志（敬称略）

鈴木　美和子

貴重なご懇志をありがとうございました。

編集室

ご住職へお願い

「赤羽御坊」は、赤羽地域教化センター事業として取組むようになって、2年を経過しました。全てのご門徒さんに親しんでいただける新聞を目指しておりますが、未だ、この新聞を一度も目にしたことのない方が大勢おみえになるのが実情であります。

手次寺をとおしてお手元へお届けする方式をとっておりますので、何分のご理解をいただき、然るべき手立を講ずるご配慮を賜わりますよう、改めてお願い申し上げる次第です。

今回は、10月に厳修した宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌お待ち受け法要のようすをお伝えする特集号と併せてお届け致します。

広報部では、幅広い情報の提供を期し、新たに蓮正寺住職・稲垣智師並びに正念寺若院・平野知師に編集のお手伝いをいただくことになりました。

赤羽地域教化センターウェブ

http://www.katch.ne.jp/~akabane_betuin/

仏事で困ったら…

携帯からのアクセスはQRコードから

1. 仏事Q&A
2. 行事案内
3. 赤羽御坊日誌

岡崎教区 赤羽別院

宗祖親鸞聖人750回御遠忌 お待ち受け法要厳修

74年ぶり赤羽別院へ 御門首御親修

私たちの赤羽別院では、待ちに待った歴史的瞬間を迎えました。

平成二十二年十月十七日午前八時三十五分・当別院の住職である真宗大谷派第二十五代大谷暢顯御門首夫妻が、当別院の山門をお潜りになり、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け法要に御親修いただきました。

当日、午前中に執行された植樹式では「菩提樹」が御夫妻と浅野輪番の手で植栽され、この旨を石に刻んだ標柱が添えられました。

帰敬式では百七名の方々が、御門首自らのご執刀により仏弟子となられ、仏法聴聞を規範とした生活を営むことを誓われました。

午後は、本山の杉浦財務長による内局挨拶のあと、四百名を超す参拝者が見守るなか、御門首による登高座・表白につづく勤行では、正信偈・和讃が堂内割れんばかりに声高らかに唱和されました。

つづく記念講演では、田代俊孝師による「今、いのちがあなたを生きている―科学の向こうにあるもの―」を聴聞しました。

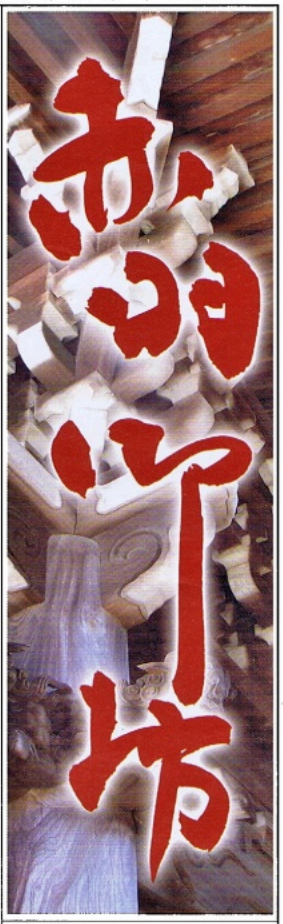
最後に、浅野怜輪番より、鄭重な謝辞が述べられて、お待ち受け法要は盛会裡にその幕が閉じられました。

内陣荘厳

御堂全景

お待ち受け法要御親修

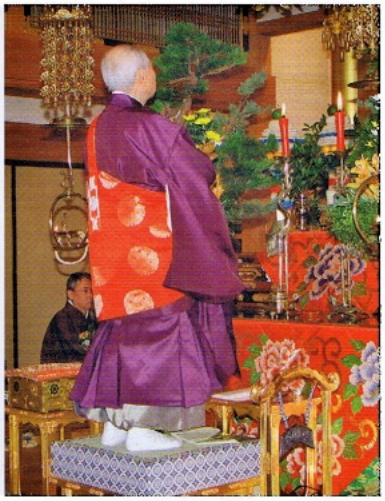
御門首夫妻来院



赤羽別院報・特集号
発行所
真宗大谷派
赤羽別院　親宣寺
発行人
輪番　浅野　怜
愛知県幡豆郡一色町大字赤羽字上郷中14
Tel・Fax（0563）72－2308

表白拝読

御門徒参拝


登高座

輪番・堂衆・列座出仕

御門首出仕

御門首夫人参拝

帰敬式

受式者誓いの言葉

御門首による剃刀の儀

記念講演

田代俊孝師による記念講演

満堂の聴聞者

屋外テントからの聴聞

アトラクション・オカリナとピアノ演奏

植樹式

記念樹と標柱

御門首夫妻と輪番による鍬入れ式

輪番から法名伝達

歓迎懇談会

輪番夫人より記念品贈呈

法圓寺住職・聖運寺坊守より花束贈呈

出雲路岡崎教務所長あいさつ

輪番あいさつ

オカリナの音に合わせて恩徳讃斉唱

石川門徒会長の発声による乾杯

御門首夫妻赤羽別院を後に

輪番謝辞

御門首ご挨拶要旨

本山御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」が発信されたことは誠に意義深く、今こそ宗祖聖人が顕かにされた本願念仏のみ教えに生きる人の誕生を願い、正信偈に仰せになっている「道俗時衆、共に同心」の語りかけに、私たち一人ひとりが、とも懇ろな心で聖人の御遠忌をお迎えし、あらゆる人々と共に同朋社会の顕現につとめてまいりたく存じます。

来る二〇一一年の宗祖御遠忌法要には、御真影の前で皆様と共に念仏相続のご勝縁に遇わせていただきますことを心より念じ、挨拶といたします。

二〇一〇年十月十七日